定本 山頭火全集

第五巻

春陽堂版

定本　山頭火全集　第五巻

昭和四十九年十月　三十　日　第二刷発行

著作者　種田山頭火

発行者　和田欣之介

東京都中央区日本橋三ノ四ノ一六

発行所　株式会社　春陽堂書店

印刷　三協美術印刷株式会社

製本　有限会社　丸山製本所

0395-200105-3066

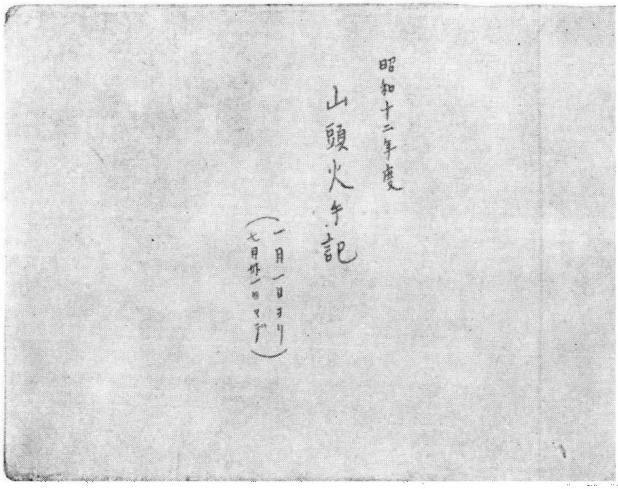
目次

其中日記（九）……一
其中日記（十）……一三七
其中日記（十一）……二一七
道中記……二六五
其中日記（十二）……三一一
旅日記……三三五
旅日記……三六四
其中日記（十三）……四五九
旅日記……四九五
解説（大山澄太）……五六九

其中日記(九)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

〔自筆ノート＝その十九　写真はその扉（第一頁）。昭和十二年一月一日から七月三十一日に至る間の庵住日記である。表紙には「其中日記」とのみ記してある。〕



〔昭和十二年〕

自戒三則

一、物を粗末にしないこと
一、腹を立てないこと
一、愚痴をいはないこと

誓願三章

一、無理をしないこと
一、後悔しないこと
一、自己に佞らないこと

欣求三条

一、勉強すること
一、観照すること
一、句作すること

一月一日　晴――曇。

明けましておめでたう。
九時帰庵、独酌。
賀状とり〳〵。
午後、樹明居へ、御馳走になる、来客数人、なか〳〵賑やかであつたが、うるさくもあつた。
留守中、敬君来庵、すみませんでした。
うたゝ寝、覚めると暮れてゐた。
酒、もうまいが餅、もうまい、飯もありがたいが水、もありがたい。
夜おそく八幡連中来庵、星城子、鏡子、井上、杉山さんの四人。
豚を鋤焼して飲む、ごろ寝したのは三時を過ぎてゐたらう。

一月二日　曇。

朝寝して、起きるとまた酒、豚汁はおいしかつた、さすがに井上さんはコツクだつたらしい。
堤さん、後を追うて来た、お土産として銘酒二本。
夕方、みんないつしよにタクシーで湯田温泉に遊ぶ、M旅館で賑やかに会食、近来になくハシヤい

だ。

十時の汽車に乗るべく、またタクシーで、――私はたうとう愚劣きわまる酒乱患者となつてしまつた！

一月三日　曇。

茫々たり、漠々たり、昏々たり、沈々たり。

庵中独坐。

自己清算しろ、自己破算か！　自己決算か！

おのづからなる自懐作用！

――生きてゐたくない、死にたい――それも執着だ。

この寂寥、この憂欝、この虚無。

たへがたし、其中一人酔つぱらふ。

生きてゐる真実、食べることの真実、あはれ〳〵。

天地人一切の有象無象！

酒、酒、餅、餅、新年、新年。

老醜。――

一月四日　曇。

やゝ落ちつく。

午後、樹明君来庵、酒一杯、飯一杯。

夕方、敬君来庵、一升樽さげて。

同道して湯田へ、一浴して戻る、酒が残つてゐるのでそれだけ飲む。

熟睡安眠、夢も見なかつた。

一月五日　晴。

日本晴である、昼寝。

樹明君来訪、例の如く酔うてそれからそれへ、――馬鹿、阿呆。――

一月六日　雨――曇。

陰鬱な一日。

餅があるので、鼠が来てゐるお正月（いつもはゐない、ゐつかない）。

考へる、――強く生きよ。

一月七日 曇。

或る青年来庵、間もなく樹明君来訪、三人でのんびり飲む。
咲いた、咲いた、机上の梅が、床の水仙が。
一人となればまた沈欝な一夜。

一月八日 曇。

あたゝかい冬だが、昨日今日はさすがに寒い。
閑居読書。

一月九日 曇。

一切放下着。——
転身一路。——
泥中の魚、辛うじて水中の魚！
自他共に醜悪愚劣。
酒なし、煙草なし、石油なし、むろん小遣なんか一銭もなし。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一月十日　曇。

雪、初雪である。

自然にかへれ、自己にかへれ、人間にかへれ。

午後、暮羊君来庵、つゞいて樹明君来庵、牛肉の鋤焼で飲みはじめる、それから彷徨する。

苦しかつた、心臓が破裂しさうだつた。

雪あかりで自分を見詰める。――

一月十一日　晴、曇、雪。

雪、雪、此地方には珍らしい雪景色を展開した。

雪を観賞する。

寒い、寒い、オイボレ、オイボレ。

一月十四日　晴。

晴れて来た、をり〳〵氷雨が降つた。

どうにもならない私の人生。

一月十二日　曇。

小雪ちらほら。

I老人来訪、彼もまた奇人たるを失はない。

一月十三日

Nさん来庵。

こんとんとしてからつぽなり。

一月十四日　晴。

冬、冬をひし〳〵と感じる。

からだが痛い、火燵であたゝめる。

何もかも無くなつた、命だけはあるが。

無心にして逍遙遊せよ。

午後、Nさん来訪、餅を頂戴する。

読書。

すこしさみしい。

一月十五日　晴。

めつきり白髪がふえてゐるのに驚く。
蟄居十日、断酒五日。
朝は雑煮、昼は無、晩もまた無。
まるで水底にゐるやうだ。

一月十六日　晴。

銭が欲しい、酒も米も油も。
久しぶりにて御飯にありつく、うまかつた。
生死を生死すれば生死なしといふ、まつたくだ。
なつかしいかな小鳥の群、冬の表情の一断面。

一月十七日　曇。

雪もよひ、今にも降りだしさう。

身心安静。

樹明君来庵、周二君も来庵、めづらしい三人でひさしぶりの快飲。

鮓がおいしかつた、鮓そのものよりもそれをこしらへて持つて来て下さつた心が。

めでたく解散。

一月十八日　曇。

ぬくい、うれしい。

うたゝ寝の夢のゆくへはいづこだらう。

今日はアルコールの誘惑に打ち克つことが出来た。

ポストまで出かける。

梅もよろしく椿もよろしく水仙もよろしく。

一月十九日　曇。

しづかな雨、しづかな心。

郵便は来なかつた。

南枝落北枝開、これが宇宙の相である。

敬君来庵、樹明君も、暮羊君もまた、にぎやかな酒宴が初まつた、愉快々々。

一月廿日　曇。

毎日の冬ごもりには困るけれど詮方ない。

朝がへり、公明正大だ。

身辺整理。

昨夜の今朝で、さすがの山頭火も少々ぼんやりしてござる。

ポストまで。

梅の花ざかり。

濡れてかゞやく枯草のうつくしさよ。

Nさん来訪、Fさんといつしよに。

飲めば酔へる幸福を祝福すべし。

年賀状をぼつ〳〵認める、のんきだね。

夕月がほのかに照る、白船君だしぬけに来庵、これはこれはとばかり話しこんでしまつた、八時の汽車へ見送る、お土産の吟醸をいたゞく。

ふくろうが啼く、さびしいと思ふ。

ぐつすり睡れた。

一月廿一日　雨。

めづらしい早起、すぐ飲みはじめる、ちびり〳〵うまいなあ、白船君ありがと。
ひとつひとつ餅を焼いては食べる。
貧楽を味ふ。
私は身心共に例外ではないかと考へる。
したのぢやない、なつたのだ。
ポストへ出かけたついでに入浴。
夕方敬君来庵、脱線談を聞くこともお正月らしい気分だ。
万事めでたしめでたし。

近頃の感想〔注＝表題のみ記してある〕

遺言〔注＝表題のみ記してある〕

――健に――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com